

# 模倣から始める表現あそび

～「身体表現指導法」の授業内容と表現のポイント～

島 崎 あかね

私たちは言葉で人に何かを伝えるときに、「○○のように」とか「△△らしい」といったように、その大きさや色、形などに比喩を付けることが多い。例えば、「赤ちゃんのように小さな手」、「雪のような白」、「春らしい陽気」などといったように、一般的にイメージしやすい比喩を加えることで、伝える相手により具体的かつわかりやすく伝えることができるからである。それでは、言葉ではなく身体表現(ゼスチャー)で人に何かを伝えるとしたら、相手に伝わりやすい表現とはどのようなものだろうか。言葉を用いず動きだけでそのものを表すには、言葉に比喩を付けるのと同様に、誰もがわかる特徴的な動きやイメージを表現することが必要なのではないだろうか。

身体表現とは、文字通り「身体を使って表現する」ことであるが、本学における「身体表現指導法」の授業では、保育者を目指す学生が相手(乳幼児)に何かを伝えるための表現活動を実践的に学べるよう表現あそびを取り入れている。ここでは、授業で行っている「模倣」がキーワードになる内容と表現活動におけるポイントを紹介したいと思う。

## 1. 鏡になってみよう(「ミラーマン」)

これは、指導者が対象者に対して正面に立って動きを指導する際、対象者から見て左右がわかりやすくなるように考えて動くものである。対象者の年齢が低い場合は特に言葉による号令よりも目から入る情報(見た目)のほうがわかりやすいため、対象者から見た左右方向を優先して見本を見せることが重要である。対象者に右手を挙げてもらいたい場合は、「右手を挙げて」と言いながら指導者は自分の左手を挙げる、ということである。

このことを応用した表現あそびが、「ミラーマン」である。4～5人のグループを作り、1人がリーダーとなって正面に立ち好きなポーズをとる。他の人はリーダーのポーズを鏡に映ったように反転させてポーズをとる。リーダーの形を真似すると同時に、「鏡に映った」形になるように左右や前後の向きに注意しなければならない。

普段何気なく見ている鏡に、どのように映りそれがどのように見えるのかを意識することで、指導者として人から見られることと相手を観察することを実践的に学ぶことができると思われる。

## 2. 数字づくり・ひらがなづくり

これは、4～5人のグループに分かれ、指導者が決めた任意の数字またはひらがなをグループの全員の身体を使って床の上で形づくるものである。天井から見てその数字(またはひらがな)がわかるように、身体の高さや柔軟性などを協力し合って工夫することができる。

数字は1桁から始め、次第に2桁にするなど応用させる。指導者は、任意の数字をいうだけで、アラビア数字でも漢数字でもグループのアイディアに任せる。また、ひらがなの濁点・半濁点も靴を利用するなどのアイディアを認める。

## 3. いろいろなものになってみよう

身近な動物や現象を表現するゼスチャーゲームである。5人程度のグループに分かれ、「動物」「自然・風景・建造物」「スポーツ」などのテーマに沿って、表現するテーマ(内容)をそれぞれ3種類ずつ決め、ゼスチャーで表現し他のグループにあててもらうというものである。ここではイメージをどれだけたくさん思いつくことができ、それをどう表現するかという演じる側と、表現されたものをどう読み取って自分のイメージとリンクさせて答えを導き出すかという、受け手側の発想がどれくらい豊かであるかが重要なのである。つまりグループ全員が同じ動作をするのではなく、役割を決めたり各自が持つイメージに合わせた動きを表現することで、他のグループへのヒントが増えるように工夫することができる。例えば「動物」のゾウをテーマにした場合、腕を左右に振って鼻の長さを表したり、両手で耳の大きさを表したりとその人が持つゾウのイメージに合わせて様々なゼスチャーを見せることで、ゾウという答えを導き出せるようなアイディアをどれだけ思いつくか、ということである。

今年の1年生が表現したテーマを挙げてみると、下記のようなものが多かった。

- ・「動物」：ゾウ、ラッコ、ゴリラ、ペンギン、ウサギなど
- ・「自然・風景・建造物」：台風、海、千手観音など
- ・「スポーツ」：野球、テニス、ボーリング、水泳、バスケット、など

いずれのテーマも、その特徴をいかにとらえ、表現することで相手に伝えるかということがポイントになるが、特にスポーツの場合は動き自体が似ている種目の違いをどのように表現するかが正解を導き出すヒントになる。例えば、野球とソフトボールはピッチャーの投球動作、バドミントンとテニスはサービス、弓道とアーチェリーは弓を射るまでの動作(所作)、など特徴に違いのある場面をゼスチャーすることで種目の違いが明確になるのである。

ここで、「相手に伝わりやすい表現」という観点から、身体表現のポイントを挙げてみると以下のようにまとめられる。

- ①恥ずかしがらず、大きく動く。
- ②メリハリをつける。
- ③ゆっくり動く。
- ④特徴を捉える。
- ⑤声や音、顔の表情も加える。

伝える相手(対象者)や表現する内容にもよるが、細かい動きや早い動きはわかりにくい。短大生にとって人前で何かを表現することは恥ずかしいという気持ちが働き、どうしても動きが小さくなったり早くなってしまうことが多いが、伝わらなければ何度も同じことを繰り返さなければならないことなので、指導の中ではゆっくり大きく動くことを伝えている。

表現活動とは、5領域の「表現」にも示されているように、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことであるから、その人自身の思いや考えを第三者に伝えることである。したがって、指導者の指示や指導者の通りに行う模倣とは全く違うものである。しかし、まず模倣から始めることで相手を見ること・観察すること、そして相手からどのように見られているのかを実践的に身につけ、表現のアイデアや工夫の引き出しを増やすことによって、より豊かな表現活動が展開できると思われる。人前で表現することに慣れ、自らの感情や感性を豊かに表現することができれば、指導者となった時にその対象者の感性を存分に引き出すことができる指導が可能であると信じて、これからも模倣から始める表現あそびを取り入れていきたい。